古代の烽ネットワークと鞠智城

大高 広和

はじめに

鞠智城は、『日本書紀』天智天皇四年（六六五）八月条に築城記事のある大野城や基肄城とほぼ同時期に築かれたものと考えられる（熊本県教委二〇一二）。その前年の『日本書紀』天智天皇三年（六六四）是歳条には、

> 於二対馬島・壱岐島・筑紫国等一、置二防与レ烽。又於二筑紫一、築二大堤一貯レ水、名曰二水城一。

と、対馬島・壱岐島・筑紫国等に防（防人）と烽が置かれ、筑紫に水城が築かれた。これらは六六三年の白村江での唐・新羅連合軍への敗戦に伴うもので、朝鮮半島から九州北部への侵攻への備えとして国家的に烽を整備したことが分かる。

烽による情報伝達は漢代の中国辺境での事例が有名で、制度・技術的に様々な限界もあるものの、古代においては最速の情報伝達手段である。右の記事は大野城を始めとする古代山城築造記事に先立つもので、敵の襲来をいち早く筑紫大宰や中央へ伝える態勢を急いで整えたことを意味しよう。

右のような事情から、古代山城と烽は密接な関係にあるものとみられ、鞠智城についても、外郭線上や近隣の地名や伝承から烽との関係が指摘されてきた。しかし、この天智天皇三年以降に設置された烽は、基本的に単体ではなく都や大宰府まで連なって機能するものだったと考えられ、そのようなネットワークとしての烽の実態については、まだまだ検討が不十分である。

筆者は近年、古代の烽との関連が認められる「トビ」を冠する地名（トビ地名と呼ぶ）に関心をもち、地形や立地（交通路などとの関係）などを頼りに烽ネットワークの復元の可能性を探っている（大高二〇一八。以下、旧稿と呼ぶ）。本稿では、熊本県域においてトビ地名を始めとする古代の烽に関わる可能性のある地名を集成・吟味して、烽ネットワークの復元の可否を検討し、その中での鞠智城の位置づけを考えることにしたい。

一、古代の烽の立地と地名

旧稿と重複する部分はあるが、古代の烽の基本的性格、特に立地形態や地名との関係についてまとめ、本稿における問題意識と分析視角を提示する（一）。

（一）史料にみる烽の基本的性格

先述の天智天皇三年是歳条など史料に明記されてはいないが、瀬戸内から畿内にかけての西日本にもその後間もなく烽が整備されたと考えられ、「蝦夷戦争」が激化した八世紀後半以降は東北・東日本にも烽が整備されたらしい。しかし、これまでに確実な古代の烽

（の烽火施設）そのものの遺構は発見されておらず、文献史料によってその姿を想定するほかないにもかかわらず、その史料も基本的には唐の規定を引き写した性格の強い養老軍防令の烽関係条文（66～76条[二]）に限られるため、その実態には謎が多い。

養老軍防令の規定によれば（瀧川一九五二a・一九五三、高橋一九七一、永留一九七九、佐藤一九九七、亀谷一九九八、松原二〇〇九）、まず烽同士は約二一キロメートル（四〇里）間隔で設置するが、相互に視認できることが優先とされた。ただし各種のノロシの再現実験では、望遠鏡のない古代において、約二〇キロもの距離で下記の通り烽を運用することは現実的には難しいとみられている[三]。そもそも二一キロ間隔で相互に視認できる位置を確保すること自体が日本列島の地形では難しく、実際は律令の規定より狭い間隔で設置されていたとみるべきだろう。安定的な通信には七キロ程度が限界ではという見解もある（向井二〇〇七）。

昼は煙、夜は火を挙げる数によって敵の来襲およびその多寡を次の烽に伝える仕組みで、そのための烽火施設が三つ、遠くから判別できるよう二五歩（四五㍍）以上離して設定された。ただしこれも「山嶮地狭」の場合は明確に区別できればよいとされた。運用体制としては烽長二人が三烽以下を検校すると規定され、その下で烽毎に烽子四人が配置された。そして天候不良などで煙や火を挙げても次の烽に反応のない場合は、烽子が走って知らせねばならなかった。そのため、烽は交通路に近接している必要があり、高山の山頂などは立地として適さない。また十分な間隔をもって三つの烽火施設を設定でき、かつ付随する各種構造物の設置場所も確保できるような空間である必要がある。構造物としては、発火材（火炬）を濡らさずに貯えておく「舎」や、煙を出すための燃料の保管施設の存在が規定に見え、烽長や烽子のための詰所もしくは望楼のような建物も存在しただろう。

ただし、烽火施設については、火炬が乾燥させた葦や草を用いて作られ、発煙装置が「筒」状の構造をもつ竈のようなものだったことは軍防令から窺われるが、その実態はよく分かっていない。唐制には存在する橛（ホグシ）を設置するための火台が日本令には見えず、日本では土坑などの簡素な形態であったとも考えられる（木下一九八六）。

以上が軍防令による基本的な烽の性格であるが、令の規定が実態に合致するものであったかは検証が必要である。一般的に、立地間隔が短ければ、その分相対的に烽火施設が粗末なものでも実用に堪えると考えられる。立派な石組みが築かれている江戸時代の烽火台とは、望遠鏡の有無も含め、やや条件が異なっている。

（二）烽の立地類型

烽のネットワークの復元にあたっては、かつては相互の見通しや軍防令の間隔の規定を重視して、標高の高い独立峰の山頂などをつなぐ傾向にあった（豊一九六八など）。しかし、右のように烽にとっては前後の烽への見通しに加え、交通路との関係も重要で、高山では霧などの天候上のリスクも高い。

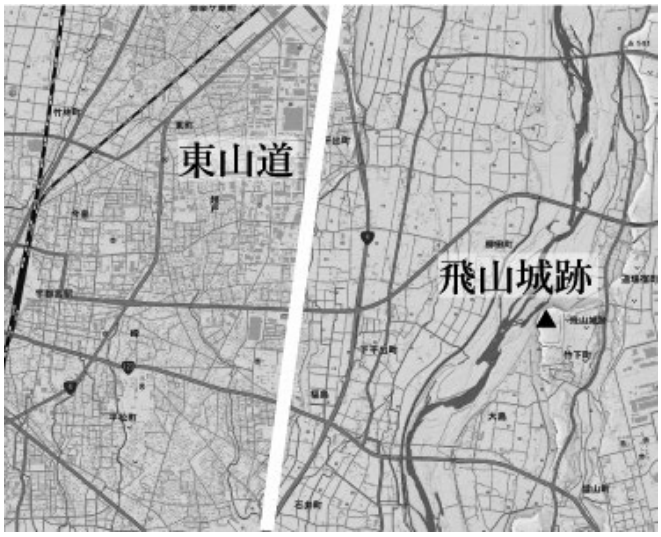
そして、一九九五年に「烽家」と記された墨書土器が発見され、日本で初めて確実な古代の烽の存在が明らかになった栃木県宇都宮市の飛山（とびやま）城跡（今平一九九七・二〇〇八）は、鬼怒川に面した比高差約二〇㍍の高台（標高一三三㍍）で、推定東山道までは約二・五

キロの距離に立地していたため（第1図）、むしろ主要な交通路に沿った独立丘陵などが古代の烽にふさわしい地理条件であることが明確となった（木下二〇一三）。

右の理解に基づき、史料にみえる烽の立地を概念的に三つの類型に分類しておく。

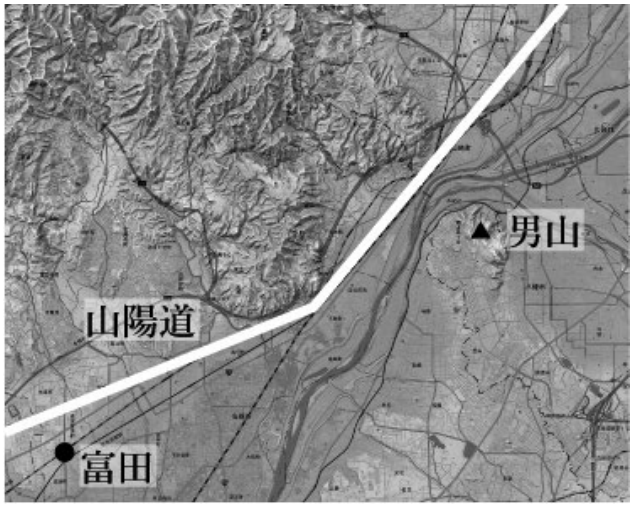
・Ⅰ類［低山型］

「成るべく低い山で、上り下りが便利で、展望がよく、交通路線に近くて、前後二烽間の距離も都合がよい」山（久保山一九三九）である。前後の関係で互いに見えさえすれば、低丘陵程度でも烽の役目は果たすのである。飛山城跡がそうであるように、このタイプが最も多かったのではないか。



第１図　飛山城跡周辺の地形

史料にみえる実例としては、『日本後紀』延暦十五年（七九六）九月己丑朔条にみえる牡山（男山。標高一四二・五メートル。以下、山名に続く数値は標高を示す）は、平安京への遷都に際して都に連絡する烽の地に選ばれた、淀川に隣接し山陽道も交通の便の良い低山である（第2図）（四）。平城京の東、春日山西麓に飛火野の地名が残る春日烽は、都での終点にあたる特別な烽だが（瀧川一九五二b）、一応この類型に分類できよう。



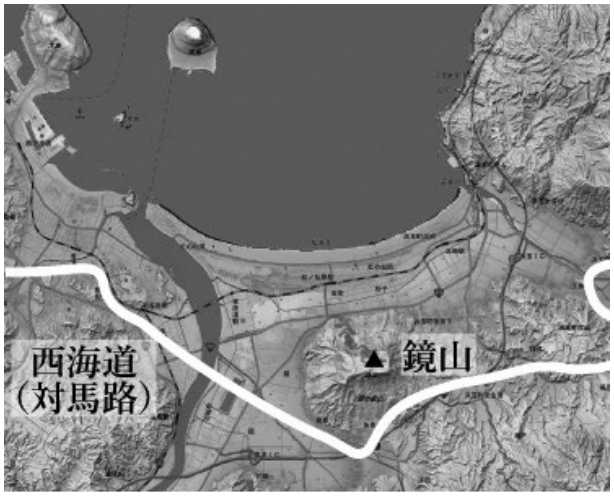
第２図　男山（牡山烽）周辺の地形

・Ⅱ類［山越え型］

平地や低山の間に高い山地が立ちはだかる場合、これを越えていく位置に設ける烽がどうしても必要になる。

『続日本紀』和銅五年（七一二）正月壬辰条に、河内国高安烽を廃し、（河内国）高見烽と大倭国春日烽を設置するという記事がある。これは平城京に連絡するための烽ルートの変更であることが明記されているが、藤原京に通じた高安烽と平城京に通じた高見烽はともに生駒山地内に位置する。前者は『日本書紀』天智天皇六年（六六七）十一月是月条に築城記事があり、大宝元年（七〇一）に廃された高安城のある高安山南の峠付近かと想定するが、はっきりしない。後者は生駒山（六四二メートル）南麓の暗峠（くらがりとうげ）（闇峠。奈良県生駒市と大阪府東大阪市との境）付近の天照山（五）（五一〇メートル）かと

第３図　天照山（高見烽）周辺の地形



第４図　鏡山（褶振烽）周辺の地形

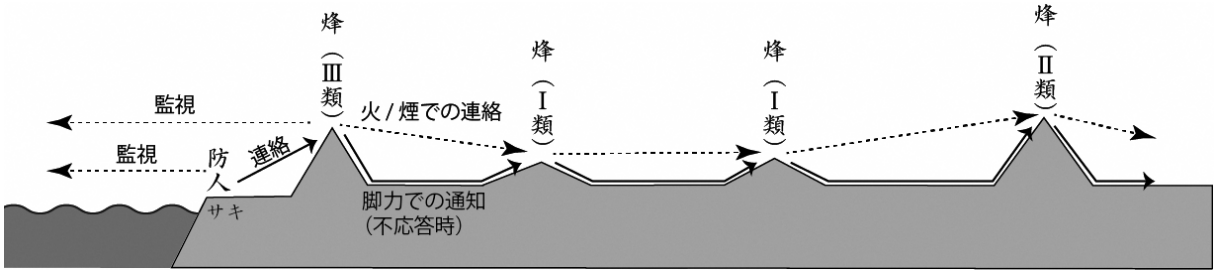
想定されており（瀧川一九六一）、峠（＝交通路）とは比高差五五㍍程度のため、立地的には烽として合理的な地形である（第３図）。これを参考にすると、Ⅱ類の烽も山地の最も高い地点というよりは、峠付近の小山がその適地であろう。

・Ⅲ類［沿岸型］

海上の異変を察知して烽火を挙げ始めるため、あるいは遠くの島からの連絡を受けるための烽である。当時の沿岸防衛体制からすると、沿岸では防人（崎守・前守）が駐在していたはずで、烽の要員とともに敵の来襲への警戒・見張りを行い、大宰府・中央へ連絡することになっていたと考えられる。冒頭で引用した『日本書紀』天智天皇三年是歳条のように、白村江での敗戦後、防と烽の設置が山城の設置に先駆けて現れていることは、まさにそのような構図を物語っているものと考えられる。

史料上では、『肥前国風土記』で唯一所在が明確な松浦郡の褶振烽がこの類型に合致し、北に玄界灘を望み壱岐方面の海域の監視に適した、唐津市の鏡山（領巾振山。約二八四㍍）の山上にあったとみられる（第４図）（木下二〇一三）。大宰府と壱岐・対馬とをつなぐ西海道対馬路（駅路名称については木本二〇〇三による）が鏡山の南麓を通るとみられ、この類型の烽もやはり交通路と無関係ではないが、ある程度広い見晴らしが得られる、沿岸部の山上に位置したのではなかろうか。

以上の立地の三類型を踏まえ、沿岸からの烽による情報伝達を模式化すると、第５図のようになる。古代日本においては、地形・地域次第ではあるものの概ねⅠ類を基本として、二一キロよりは狭い



第５図　烽の立地と連絡構造模式図

間隔で烽が設置され、都や大宰府までの情報伝達のネットワークが形成されていたと想定したい。

（三）烽の名称と想定地の地名

最後に、烽探索の手がかりとなる烽と地名との関係についてまとめておく。

『和名類聚抄』（巻十二〔二十巻本〕、燈火部「烽燧」）や『万葉集』（巻六―一〇四七番歌[六]）、『古今和歌集』巻一[七]などによれば、古代日本において烽は「とぶひ」と称されていた[八]。

先述の宇都宮市の飛山城跡は、中世においては「トミヤマ」ないし「トビヤマ」と発音され、南北朝時代の「富山」「鴟山」の漢字表記が戦国時代に「飛山」に変化しており（峰岸一九九七）、その城名は古代の烽に由来するとみられる。また『古今和歌集』に詠まれた奈良の春日野の烽（春日烽）も、飛火野の地名が残っている。

すなわち、現段階で確実に古代の烽に由来すると言える地名は「とぶひ」に由来するものに限られる。「トビ（飛・鳶など）」「トミ（富など）」を冠する地名のうち、「飛渡」「飛石」などの渡河点や「福富」などの好字としての「富」に由来するものなどは除く、「トビヤマ」「トビツカ」「トビクマ」など烽に由来する蓋然性が高いと判断される地名に対し、右に検討したような立地条件を考慮すれば、烽探索の有力な手がかりにできる[九]（大高二〇一八）。

もう一つ有力なのは、従来の研究で注目されてきた「火」にまつわる「ヒノヤマ」系の地名・山名である。特に、『肥前国風土記』では烽二十所の存在が記されているが、そのうち養父郡の烽が佐賀県鳥栖市の「朝日山」に、神埼郡の烽が神埼市の「日ノ隈山」に比定されている（久保山一九三九、木下一九九七）。これらは佐賀平野を一望できる標高一〇〇メートル台の低山で、駅路にも近く両烽間の距離は一三キロ弱である。古代の烽に関係する蓋然性は高いと言えよう。烽としてふさわしい立地条件かを加味すれば、「ヒノヤマ」系の地名も烽ネットワーク復元の手がかりとして用いるべきだろう（木下一九八六、木本二〇〇四、向井二〇〇七）。

また、先述の『日本書紀』天智天皇三年是歳条では、烽に対して「ススミ」の古訓が伝わる。これに関連して、鞠智城跡では西側土塁線北側の見晴らしの良い高所に通称「涼みヶ御所」（一六七・五メートル）という地点があり、「烽見ヶ御所」の字を当て、望楼の存在など烽との関連を想定する考えがある（久保山一九三九、熊本県教委二〇一二）。近世の地誌類では、「涼みヶ御所」は由来不明としつつも米原長者の妻の納涼の地を土民が名付けたという説が紹介され（『肥後地志略』）、長者伝説として理解されている。現段階では「ススミ」が烽と実際に結びつくかは定かでなく、この点については後述したい。

鞠智城ではほかに、西側土塁線中央付近の最高所が通称「灰塚」（一六五・五メートル）と呼ばれ、現在は展望所が設けられている。「涼みヶ御所」から南方への視界はこの「灰塚」の高まりによって遮られており、また烽の痕跡としての灰の層の存在を示唆する地名の可能性があるため、むしろ「灰塚」の方が注意される（木下二〇〇二）。しかし「ススミ」と同様に、古代の烽に由来するものかはっきりしないため、やはり後述することとしたい。

以上を踏まえ、熊本県域の烽に関連する可能性のある地名を集成し、立地等について検討を加えていくことにする。

二　熊本県域の烽関連地名

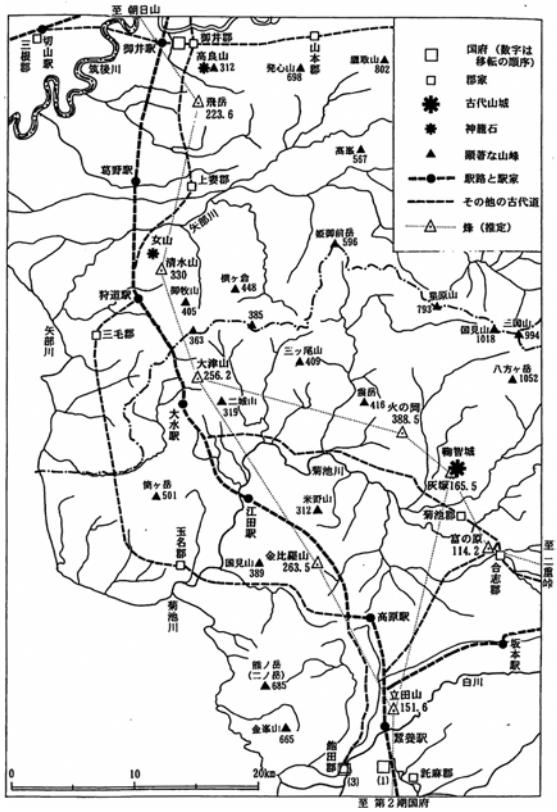
明治五年（一八七二）以降、全国的な地誌編纂事業が行われ、同十五年から十七年にかけては小字の調査が行われた。しかしその大部分は関東大震災で焼失し、青森・秋田・宮城・福岡・熊本・大分・佐賀・鹿児島の各県の分だけが東京大学史料編纂所に残っているに過ぎない（一〇）。さらに熊本県においては、地誌編纂事業において提出された郡誌・村誌の副本（原本は関東大震災で焼失）が残っており、全国的にも大変貴重である（熊本県立図書館所蔵）。村誌には明治六年以降の地租改正に伴う地引絵図との照合や明治十四年九月以降の県土木課による測量を踏まえた村図が含まれ、さらにその多くが一般に刊行された各自治体史類に収載されている。

これらを活用し、トビ地名やヒノヤマ地名の集成と位置の特定、烽の立地としての妥当性の評価を行った（一一）。また、小字以外にも山の呼称や神社の名称、中世城館名などに烽に由来するとみられる名称が残っている場合があり、それらの収集・検討にも努めた。

なお、並行してそのほかの古代の烽に由来する可能性のある地名についても適宜検討を行った。前項で紹介した「ススミ」に関係がありそうな地名には「涼松（スズミマツ）」が一定数見られたが、文字通り涼むための松に由来する地名と見受けられた。ほかに「涼塚（スズミツカ）」が一件（阿蘇郡西原村鳥子）あり、こちらは烽の可能性を否定できないものの、鞠智城跡内の「涼みヶ御所」を積極的に烽と評価するほどではない（一二）。

またヒ（火・日・樋）に関係する地名も多いが、「日焼（ヒヤケ）」「日当（ヒアテ）」など太陽（日照）に関すると思われるもの、「樋渡・火渡（ヒワタシ）」「樋ノ口・火ノ口（ヒノクチ）」など本来は用水のための樋に関わる（上村一九九一）とみられるものがほとんどで、烽に由来する可能性がありそうなのは、ほぼヒノヤマ系の地名に絞られる。さらには火に関わる「ヤケ〔焼〕」地名も、積極的に烽との関わりを見出すには至らなかった。

これらの地名が古代の烽に関係する可能性はなお若干残されるが、ひとまずはトビ地名とヒノヤマ地名（烽と関わりなさそうなものは除く（一三））および「灰塚（一四）」の地名について第1表・第7図に示し、地域ごとに叙述していきたい。なお、「遠見」地名（「遠見山」など）については、近世の遠見番所に関わるものが大半だが、小字「富塚」と隣接している例もあるので一応対象に含めておく（一五）。古代の交通路については以下の諸研究・事典類を参照し、特に必要の無い場合は個別に根拠を示さないこととする



第6図　木下2002による烽復元図

第１表　熊本県域における古代烽関連地名表

地名	カナ(読み)	旧村名	旧郡	現市町村(合併前)	備考
(トビノヲの城)	ﾄﾋﾞﾉﾖ	(下坂下)	玉名郡	南関町	中世の坂下城の別名。
日嶽	ﾋﾀﾞｹ	宮内村	玉名郡	荒尾市	小字調査書は「日焼(ﾋﾀｹ)」とする。日嶽(52m)あり。
上飛ヶ浦	ｶﾐﾄﾋﾞｶﾞｳﾗ	永塩村	玉名郡	長洲町	隣接して「下飛ヶ浦」もあり。
遠見下	ﾄｦﾐｼﾀ	清源寺村	玉名郡	長洲町	近世番所か。
富尾村	ﾄﾐﾉｵﾑﾗ	—	玉名郡	玉名市	金比羅山にノロシ伝承あり。
富尾	ﾄﾐﾖｳ	用木村	玉名郡	和水町(菊水町)	隣接して「南富尾」もあり。村図では「北富尾」。
(飛尾社)	(ﾄﾋﾞｵ)	下津原村	玉名郡	和水町(菊水町)	現阿蘇神社の中世の名称。
(日嶽城)	ﾋﾀｹ	(開田)	玉名郡	玉名市(岱明町)	鶴城(201m)と亀城(92m)あり。
上日ノ岳	ｶﾐﾋﾉﾖｶ	下内田村	山鹿郡	山鹿市(菊鹿町)	隣接して「下日ノ岳」あり。日岡山(312m)あり。
(灰塚古墳)	ﾊｲﾂﾞｶ	(池永)	山鹿郡	山鹿市(菊鹿町)	合瀬川古墳。
鷲ノ尾	ﾄﾋﾞﾉﾖ	原村	菊池郡	菊池市	
鷲之尾	ﾄﾋﾞﾉﾖ	雪野村	菊池郡	菊池市	
灰塚	ﾊｲﾂｶ	赤星村	菊池郡	菊池市	
富納村	ﾄﾐﾉｳﾑﾗ	—	合志郡	菊池市(泗水町)	近隣に「飛熊」「吉富」もあり。
遠見塚	ﾄｦﾐﾂｶ	栄村	合志郡	合志市(合志町)	
(灰塚)	ﾊｲﾂﾞｶ	(御代志)	合志郡	合志市(西合志町)	明治5年の村名かつ現存地名。
灰塚村	ﾊｲﾂﾞｶﾑﾗ	—	合志郡	大津町	
富応村	ﾄﾐﾉﾖﾑﾗ	—	山本郡	熊本市(植木町)	
灰塚原	ﾊｲﾂﾞｶﾊﾙ	改寄村	飽田郡	熊本市(北部町)	
富尾畑	ﾄﾐﾖﾊﾀ	徳王村	飽田郡	熊本市(北部町)	村誌では「富尾」。池田村「富尾」と一連。
富尾	ﾄﾐﾉﾖ	池田村	飽田郡	熊本市	
灰塚	ﾊｲﾂﾞｶ	亀井村	飽田郡	熊本市	
(朝日山)	ｱｻﾋﾔﾏ	(横手)	飽田郡	熊本市	花岡山(133m)の別名。
富塚	ﾄﾋﾞﾉﾂｶ	嶽村	飽田郡	熊本市(河内町)	
灰塚	ﾊｲﾂｶ	健軍村	託摩郡	熊本市	
灰塚	ﾊｲﾂﾞｶ	寺迫村	上益城郡	益城町	隣接して「灰塚ノ前」「遠見塚」あり。
遠見塚	ﾄﾐﾂｶ	寺迫村	上益城郡	益城町	隣接して「灰塚」あり。
遠見塚	ﾄﾐﾂｶ	木山村	上益城郡	益城町	安永村「遠見塚」と近接。
遠見塚	ﾄﾐﾂｶ	安永村	上益城郡	益城町	木山村「遠見塚」と近接。
遠見塚	ﾄﾐﾂｶ	井寺村	上益城郡	嘉島町	村内に「富屋敷」あり。
富山	ﾄﾐﾔﾏ	島木村	上益城郡	山都町(矢部町)	
遠見塚	ﾄﾐﾂｶ	貫原村	上益城郡	山都町(清和村)	
遠見山	ﾄﾐﾔﾏ	緑川村	上益城郡	山都町(清和村)	遠見山(1268m)あり。
飛尾	ﾄﾋﾞﾉﾖ	東阿高村	下益城郡	熊本市(城南町)	隣接して「南飛尾」あり。飛尾横穴群。
富尾鶴	ﾄﾐﾖﾂﾙ	萱野村	下益城郡	美里町(中央町)	村内に「富屋敷」あり。
日嶽	ﾋﾀﾞｹ	北海東村	下益城郡	宇城市(小川町)	現南小川日岳(243m)。
鷲山	ﾄﾋﾞﾔﾏ	長野村	葦北郡	水俣市	隣接して「下鷲山」あり。
遠見	ﾄｳﾐ	袋村	葦北郡	水俣市	近世番所由来。
遠見塚	ﾄﾐﾂｶ	黒渕村	阿蘇郡	小国町	
鷲尾	ﾄﾋﾞﾉﾖ	下城村	阿蘇郡	小国町	中世飛尾(鷲ノ尾)城あり。
涼塚	ｽｽﾞﾐﾂｶ	鳥子村	阿蘇郡	西原村	
灰塚	ﾊｲﾂﾞｶ	黒川村	阿蘇郡	阿蘇市(阿蘇町)	隣接して「中・東・西灰塚」「灰塚尻」あり。
飛塚	ﾄﾋﾞﾂﾞｶ	河陰村	阿蘇郡	南阿蘇村(久木野村)	
遠見塚	ﾄﾐﾂｶ	高森村	阿蘇郡	高森町	
富塚	ﾄﾐﾂﾞｶ	菅尾村	阿蘇郡	山都町(蘇陽町)	塩出迫村の「遠見塚」に隣接。現上益城郡。
遠見塚	ﾄﾐﾂｶ	塩出迫村	阿蘇郡	山都町(蘇陽町)	菅尾村の「富塚」に隣接。現上益城郡。
富ヶ尾	ﾄﾋﾞｶﾞﾖ	人吉村	球磨郡	人吉市	
灰塚	ﾊｲﾂｶ	大畑村	球磨郡	人吉市	
鷲迫	ﾄﾋﾞｻｺ	木上村	球磨郡	錦町	村内に「雀迫」もあり。
鷲山	ﾄﾋﾞﾔﾏ	須恵村	球磨郡	あさぎり町(須恵村)	
灰塚	ﾊｲﾂｶ	深田村	球磨郡	あさぎり町(深田村)	
飛岳	ﾋﾀﾞｹ	登立村	天草郡	上天草市(大矢野町)	
火嵜	ﾋｻｷ	上村	天草郡	上天草市(大矢野町)	
(樋島)	(ﾋﾉｼﾏ)	—	天草郡	上天草市(龍ヶ岳町)	
遠見岳	ﾄﾌﾐﾀｹ	赤嵜村	天草郡	天草市(有明町)	俗に「ツンダケ」。近世番所由来。
火口山	ﾋｸﾁﾔﾏ	棚底村	天草郡	天草市(倉岳町)	
遠見番	ﾄﾐﾊﾞﾝ	大江村	天草郡	天草市(天草町)	近世番所由来。
飛江	ﾄﾋﾞｴ	新合村	天草郡	天草市(河浦町)	
鷲野	ﾄﾋﾞﾉ	河浦村	天草郡	天草市(河浦町)	
遠見	ﾄﾐ	牛深村	天草郡	天草市(牛深市)	近世番所由来。遠見山(217m)あり。
遠見岳	ﾄｳﾐﾀｹ	魚貫村	天草郡	天草市(牛深市)	隣接して「西・南・北遠見岳」あり。近世番所、遠見岳(223m)あり。
遠見番	ﾄﾐﾊﾞﾝ	大江村	天草郡	天草市(天草町)	近世番所由来。
富岡町	ﾄﾐﾖｶﾏﾁ	—	天草郡	苓北町	富岡城。近世には烽火台あり。

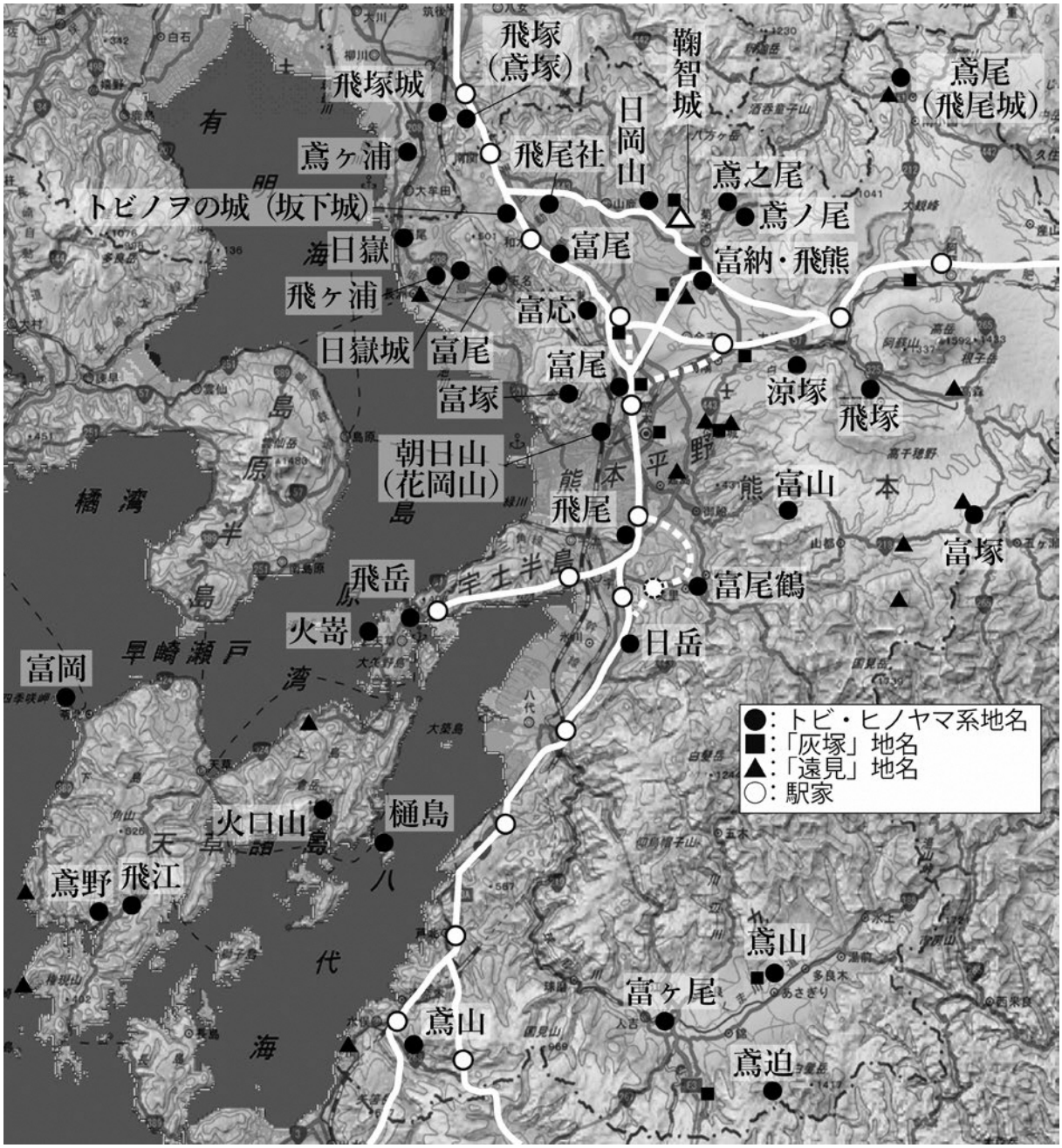
※「旧郡」「旧村名」および「地名」の括弧のないものは明治 15 年調査時のもので、括弧を付した「地名」はそれ以外の地名等である。「旧村名」で括弧を付したものは現在の大字。カナは基本的には小字調査書に従った。

（木下一九七九・二〇〇九、鶴嶋一九七九・一九九七・二〇〇四、武部二〇〇五、木本二〇一四、赤星二〇一四、網田二〇一七）。

先行研究としては、木下良氏が第6図のような筑後から鞠智城周辺までの烽ルートの復元想定を行っている（木下二〇〇二）。交通路に沿うものとして復元している以上、本稿での想定とルート的には類似しているが、烽間の距離は規定通り約二一キロを基準とし、地名よりも山の形状・立地を重視しているため、トビ・ヒノヤマ系地名については見逃している。

（一）玉名郡・山本郡

大宰府から南へ向かう西海道駅路（大隅路）は、旧稿で烽の存在を想定したみやま市高田町亀谷の「飛塚（鳶塚）」付近（「車地」地名も並存）を通過して、肥後国（南関町）へと入る。どのように肥後国内の烽に接続していくのかが未



第７図　熊本県の烽関連地名と古代交通路（破線は主な異説を表示したもの）

詳で、この「飛塚」の烽想定は不確実だが、駅路はやがて七世紀後半に遡る軍用道路とみられ（木下二〇〇三）、鞠智城へ向かう「車路」官道のルートと、肥後国府が所在した飽田・託麻郡方面に向かう「延喜式駅路」のルートに分かれる。

現在の九州自動車道と並走する「延喜式駅路」ルート方面では、南関町下坂下字米田に駅路に近接した位置に所在する中世の坂下城が、かつて「トビノヲの城」の別称（一六）をもっており、城内には「トビの屋敷」と呼ばれる区画（東西五七メートル、南北六〇メートル）が存在することが注意される（熊本県教委一九七八）。城は標高七八メートルの丘陵の南端部分に位置し、現状は樹林によって周囲の視界は遮られているが、地形データによる視認解析によれば少なくとも東南の駅路の進行方向への視界は良好で、和水町用木の「富尾（トミオウ）」へは七キロ弱の距離で接続する。

第8図　和水町用木の「富尾」（荒平山）（南東方向から）

用木の「富尾」はやはり現在の九州道および県道三号線沿いで、同地区北東の荒平山（一九三メートル）の西麓にあたっている。「トミノオ」の地名は、「烽の尾」で烽があった山の麓、裾を意味していると理解され、必ずしも小字の位置に烽を想定するわけではない。九州道から撮影した第8図の最も高い辺りが荒平山で、烽自体は九州道からも形状が判別しやすい一つ南の山の上ににあっただろうか。なお、その南麓（左側）の小丘陵付近の小字が「保立目（ホタチメ）」で、これも烽に関わるのかもしれない。この次の烽については、熊本市北区植木町（旧山本郡）の平尾山（二一五メートル）や岩野山（二一七メートル）が約八キロの距離で位置しており、烽関連地名は見出せないが立地としては都合がよい。

一方、「車路」ルートの方は、菊池川を挟むことになるが和水町の下津原に飛尾社という神社のあったことが知られる（現阿蘇神社（一七））。烽自体は同社の南側の標高八〇メートル台の丘陵地が候補地となり、約一二キロ先に次の烽と考えられる山鹿市の日岡山を見ることができ、想定としては悪くない。

以上のように、やはり官道沿いの烽の適地と言える位置にトビ地名が分布していると言える。これに加え、筑後国三池郡家や玉名郡家を結ぶ、駅路以外の交通路の存在が想定されているが、これに対応するように福岡県大牟田市から熊本県荒尾市、玉名市を経て熊本市（植木町）へと至る沿岸部にトビ・ヒノヤマ地名が散見する。

まず福岡県域で、旧三池郡、みやま市高田町田尻の森山宮の背後、標高九一メートルに城館遺構があり、これを飛塚城（田尻城・田尻飛塚城）と言ったらしい（福岡県教委二〇一七）。この北の山裾に沿って駅路から分かれた道が東西に走り、三池郡家に至った後で地形に沿って向きを南へ変える。すると西の丘陵（最高所一二三メートル）の西麓、大牟田市岬地区に「鳶ヶ浦」がある。この丘陵上に烽があったとすれば、飛塚城とは約五キロの距離で、お互いの位置をうまくとれば視認も可能だろう（一八）。

また荒尾市の北部、宮内には「日嶽」（五二メートル）がある。標高が低く北の大牟田市方面は山に遮られるなど、あまり条件は良くない

が、一応沿岸型Ⅲ類の烽の可能性は残される。ここから約六キロ東南にある長洲町の「飛ヶ浦」や、次に見る玉名市の日嶽は視認が可能である。

長洲町の「飛ヶ浦」の東約三キロの玉名市（岱明町）開田には、荒尾市と玉名市にまたがる筒ヶ嶽（小岱山。五〇一㍍）の一峰である日嶽（二〇一㍍）がある。中世には大野氏の砦（日嶽城）となっていて、山頂の鶴城とその麓（九二一㍍）の亀城とがあるが、いずれも有明海、雲仙岳、玉名平野を一望できるようである（岱明町二〇〇五）。

またさらにその東約三～四キロの菊池川下流右岸には、玉名市富尾（トミノオ）地区があり、この地名は中世に遡る。西方には筒ヶ岳から東南に降りてきた尾根がそびえ、少し谷を挟んだ先の小山を金比羅山（一四七㍍）と言う。現在その山頂には多数の岩が転がっていて金比羅神を祀る小祠があり、この山の真南に玉名郡家が位置し、その延長には一・六キロに及ぶ直線状の「郡衙道」が伸びることから、磐座祭祀の場とも言われているが（坂田一九九七）、山頂中心部にある直径・高さ約二㍍の自然石について、地元地名研究者の上村重次氏が「ここでノロシをたいた」「金平（こんぴら）さんは軍の神さま」という伝承を紹介していることが注目される（上村一九九一）。伝承の情報源が未詳だが、金毘羅山は標高が高すぎない一方で目立ちやすく、西側の樹木がなければ西・南・東の三方に視界が開ける。ここからは「延喜式駅路」沿いの和水町用木の「富尾」が北東方向八・五キロ先に視認でき、熊本市北部で駅路に合流する道が延びていくとみられている南東方向の約一二キロ先、熊本市北区植木町富応（トミオウ）地区においても、視認可能な範囲がある。伝承の真偽はともかく、「富尾」の地名の由来となった烽が金毘羅山山頂付近に存在した蓋然性は高いと判断する。

右に列挙した地名が全て烽に結びつくわけではないだろうが、以上のように玉名郡は沿岸部にも有力な烽関連地名が散見するので、複数の沿岸型（Ⅲ類）の烽による有明海・島原湾沿岸の警戒が行われていたとみられる。

（二）山鹿郡・菊池郡・合志郡（一九）

続いて、鞠智城近辺の烽関連地名についてみていく。

「車路」官道に沿うように位置する山鹿市（菊鹿町）の日岡山（三一三㍍）は、鞠智城の西側外郭線から木野川・内田川流域の低地を挟んで西に約四キロの距離にある。『肥後国誌』（巻六、菊池郡深川手永、米原村）には、鞠智城の米原長者が一日で田植えを終わらせるために日岡山に油三千樽で火を付け、田植えは終わったものの天罰で夜に「火の輪」が出て長者の屋敷・倉庫から日岡山まで一円灰燼となったという伝説がある。これまで指摘されてきているように、日岡山に烽があったことを窺わせる伝承、もしくは烽に由来する山名から考え出された説話という可能性は十分あるだろう。日岡山も北から降りてきた尾根の先端付近にあたり、あまり高い山ではなく、ほかの烽想定地の立地と似通っている。

なお、鞠智城の北方の山鹿市菊鹿町池永に存在した灰塚古墳（合瀬川古墳）は、日岡山や交通路との関係など、烽を想定すべき積極的理由に乏しい。

さて、「車路」官道は鞠智城の南を通り南東へ向かい、花房台地に上った後に南西方向、肥後国府方面に向かう本路と阿蘇方面に向

かう豊肥支路とに分かれる。この付近（菊池市泗水町）には、「車地」の小字とともにトビ地名が集中している。

富納（トミノウ）地区については、『肥後国誌』（巻五、合志郡竹迫手永）に「里俗の説、往古菅公太宰府において薨去の時、神霊一片の白旛となり飛び去り給うに、御子四ツ寺某其の御跡を追い山川を超えて此地に留り給う。依りて飛納と言い、今訛りて富納と書けり。」とある。大宰府までの連絡する烽の記憶に関するものかとも想像されるが、富納村が鎌倉時代には太宰府天満宮安楽寺の荘園で、灯油の納所であった（泗水町二〇〇一）ことに由来するのだろう。同地区に隣接する住吉地区内の「飛熊」の地名も、中世の飛熊城まで遡る（『肥後国誌』同）。吉富地区内にも「富」や「富の原」（後者は戦後の開拓によりできた地名）があるなど、トビ地名が錯綜しているが、菊池平野を挟んで約七キロ程の距離で鞠智城と対峙するこの花房台地上のどこかに、烽があった蓋然性は高い。ここから日岡山までの距離は約一〇キロで、これも適当な距離である。

その後は残念ながら阿蘇方面に向かう豊肥支路に沿う烽関連地名は見出せず、国府へ向かう本路沿いにも明確なものはない。本路に近い合志市栄に小字「遠見塚」、同御代志に「灰塚」の地名が残るが、泗水町のトビ地名集中域とは四～五キロ程度の距離で、地形的にも決め手に欠く。次の烽を先述の熊本市植木町の平尾山や岩野山、木下良氏（木下一九七九）による推定高原駅家（二〇）近くの合志市の弁天山（一四五㍍）や二塚山（一一八㍍）と推定した場合でも、の本路の延長上である熊本市池田・徳王の「富尾（トミノオ）」付近とした場合でも、花房台地上から概ね視認が可能のようだからである。ただ後者の場合距離は約一六キロで、これまでの検討からするとやや離れていることになる。

なお、菊池市の北東部、日田方面へ向かう方面に二つ小字「トビノオ」があるが（原・雪野）、必ずしも全てのトビ地名が烽に由来するとは限らないので、そういった烽とは無関係のものと理解しておく。

（三）鮑田郡・託麻郡

熊本市北区（北部町）徳王の「富尾畑（トミオハタ）」、西区池田の「富尾（トミノオ）」は一連の地名で、坪井川の対岸には木下氏が烽を想定した立田山（一五一㍍）（木下二〇〇二）や、熊本市清水亀井町（旧亀井村）の「灰塚」があるが、いずれにしてもこれらの間を駅路が通るのであり、この周辺に一つ烽を想定したい。

金峰火山（主峰は六六五㍍の金峰山）の外輪部内にある、熊本市西区河内町岳の「富塚（トビノツカ）」は、外輪部の外側が見えないので烽由来とは考えづらいが、外輪部から断層によって分断され、万日山（一三六㍍）とともに小山地を形成している西区の花岡山（一三三㍍）は、朝日山の名称をもっていたらしい（熊本市一九九八b）。

『新撰事蹟通考（二一）』（巻四、編年考徴二）は、祇園社の「社記略」を引用し、祇園社は承平四年（九三四）に「府中」の西南に勧請された後、近接する「車屋敷」に移され、さらに天元二年（九七九）に朝日山、すなわち祇園山に移ったという（祇園社はさらに正保四年（一六四七）に北岡に移り、現在の北岡神社となる）。祇園山は近代になり幕末の志士を祀る招魂祠が建立されて以降、花岡山と称されるようになったようで、ほかに岡見岳、勢高山の別称ももって

いる。右の社記略の年紀には信を置けないものの、祇園社が移ってきた後に祇園山と称されるようになったのであるから、朝日山はそれより古い名称とみてよいだろう。

ここで想起されるのは、先述の『肥前国風土記』所載の烽の推定地である。養父郡の烽は鳥栖市の朝日山に比定されており、これは交通路との関係などからかなり蓋然性が高い。池田の「富尾」からは四キロ強しか離れていないが、南側は白川や緑川などの下流域に沖積低地の熊本平野が広がり、条里が検出できなくなる現在の海岸線から東に五キロ程の辺りに古代の海岸線があったようであるから（熊本市一九九八ａ）、沿岸部の烽としての必要性からやむをえない間隔なのだろう。南方は湾入する島原湾の向こうに宇土半島、そしてその西側に駅路が走る熊本平野から益城郡方面を見渡すことが可能である。「朝日山」なる名称が全て烽に結びつくというわけでもないだろうが、花岡山は熊本平野の「沿岸部」の烽として申し分ない立地条件を備えているように思えるのである。

なお、花岡山（朝日山）では山頂から箱式石棺群が、万日山からは終末期古墳を含む多数の古墳が発見されており、その南麓の春日地区は『日本書紀』安閑天皇紀にみえる春日野屯倉の遺称地と推定されている（井上一九七〇）。そしてその南に広がる二本木遺跡群は、肥後国府（所謂「飽田国府」）もしくは飽田郡家の推定地で、八世紀中葉の大型掘立柱建物などが検出されている（熊本市教委二〇〇七）。古くから重要視された地域であったことが分かる。

（四）上益城郡・下益城郡

先述の朝日山から南へは、熊本平野を越え宇土半島の基部方面に連絡することになる。球磨駅家や「益城国府」推定地の向こう、熊本市城南町東阿高に「飛尾（トビノオ）」の小字がある（飛尾横穴群が所在〔熊本県教委二〇〇九〕）。ここは雁回山（木原山。三一四㍍）東麓の末端部にあたり、「飛尾」の尾根の上方、雁回山の山上付近や尾根筋に烽が存在した可能性がある。

なお、雁回山の北側は現在熊本市南区富合町木原という地区だが（二二）、「富合」の名称は杉合村と守富（モリドミ）村が合併したことによるもので、「守富」の地名は中世の守富庄という庄園名に遡る。「烽を守る」という意味にも解せるので、雁回山に存在した烽と関わりのある地名なのかもしれない。

駅路は雁回山の南方で西の宇土半島の先端（三角）へと向かうルートと南の大隅方面へ向かうルートに分かれる。大隅方面へ一〇㌔ほど南下すると、東側に日嶽が現われる。現宇城市小川町南小川の日嶽（日岳）は標高二四三㍍で、距離的にも烽の立地として申し分ない。現在も九州道がすぐ麓を走り、西方には八代の低地と八代海が広がる。

なお、やや内陸に入った美里町萱野の「富尾鶴」については、豊向駅を宇城市松橋町豊福ではなく、浄水寺石碑にみえる「肥公馬長」と関わらせて（木下一九七九）、その付近を駅路が通過するという想定もあるが（武部二〇〇五）、必ずしも有力とは言い難く、烽とは関わらないものとみておく。

上益城郡では、益城町寺迫に「灰塚」と「遠見塚」とが隣接する場所があり、さらにその北西一・五キロくらいの同町木山および安永に、間に宮園地区の一角を挟んで「遠見塚」が隣り合う地点がある。また、嘉島町井寺にも「遠見塚」があり、熊本市の旧託麻郡健

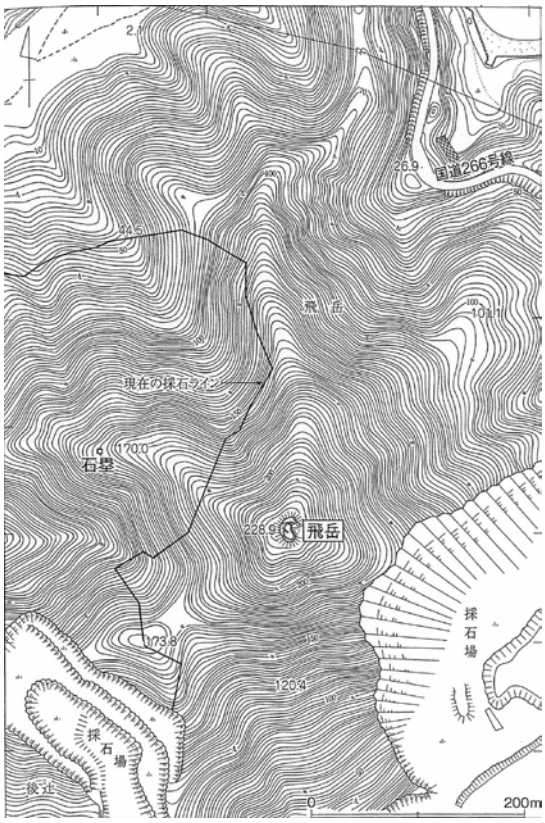
軍村にある小字「灰塚」もこれらに関わるのかもしれないが、現在知られている古代の交通路の知見などからは、これらトビ地名・ヒノヤマ系地名以外の地名を根拠に古代の烽のネットワークの存在を想定することは躊躇われる。今後の検討に委ねたい。

また、山都町島木の「富山（トミヤマ）」や同緑川の「遠見山」、同貫原の「遠見塚」はいずれも山深い地方にあり、特に遠見山は一二六八㍍の山名である。古代の「トブヒ」ではなく「遠見（トオミ）」を語源とする地名と考えるべきだろう。

（五）宇土郡・天草郡

宇土郡には有力な烽関連地名が見当たらない。次の烽は対岸の大矢野島の飛岳（ヒダケ。一二二八㍍）と仮定しても、飛岳から飽田郡（熊本市）の花岡山（朝日山）は見通すことができず、下益城郡（宇城市）の日嶽との間には二五キロ強もの距離があり、間に一つは中継を入れたいところである。宇土半島南側の尾根の一つに烽を想定して日嶽につなぐのが穏当だが、北側でも宇土市長浜町と網津町にまたがる高山（三〇五㍍）あたりは何とか花岡山への連絡ができるようである。

さて、上天草市大矢野町の飛岳については、音がヒダケなのでトビ地名ではなくヒノヤマ系地名である。かなり尖った山の形状をしており、遠くからでもすぐ判別できる山である。事典類によれば「火岳」とも書き、烽火台があったと伝えられ、三年交替の防人や役人が置かれて麓には三年（さね）ヶ浦の地名が残ったという。山は古代山城のように馬蹄形の平面形状を呈し、今では残っていないが、採石によって消失する前には山頂の北西の尾根の一角（比高差約六〇㍍）に野面積みの石塁があったといい、烽火台の施設の可能性があった（第9図）。しかし山頂の円形の石囲いからは近世の銭貨のみが採取され、中近世の狼煙場とみるのが穏当とされている（大田二〇〇七）。ただし、右の見解を否定する訳ではないが、山の位置・名称・形状などからは、古代の烽があった可能性も十分にあると考える。確かめる術のなくなったことは残念だが、周りにこれ以上ふさわしい候補地もないため、ここに烽を想定して論を進める。



第9図　飛岳周辺図（大田 2007）

天草郡には近世の遠見番所に由来する地名が多く、それらについては割愛するが、天草上島の南東にある樋島（ヒノシマ）は、中央の最高部が二三二㍍で、八代海の監視・連絡のための烽を天草側にも置いたとすれば適地だろう。飛岳までは約二五キロあって見通せないが、ちょうど中間地点の上天草市姫戸町姫浦の北端、金比羅山（二五八㍍）に遮られているため、そこで中継すれば都合がよいこ

とになる。

一方、北側の島原湾方面にはこれといった烽関連地名がないが、下島の西北端、天草灘に突き出た陸繋島である苓北町の富岡が注意される。近世天草支配の拠点とされ、天草・島原の乱の舞台ともなった富岡城は、中世の頃は袋の浦や留岡（トメオカ）と称され、近世初めに寺沢氏が富岡と改めたという通説に対し、もともと「トミオカ（遠見丘）」の地名があったという考え方も提出されている[一三]（苓北町教委一九八六）。砂州で本島（下島）につながっただけの島内には、近世の遠見番所（白岩崎、五五㍍）や烽火場（尾越、一〇〇㍍）が置かれており、烽の立地としては申し分ない。

仮に烽火場から飛岳までを結ぶと、なんとか視認は可能だが距離が四〇キロを超えており、下島および上島の北岸部で一度か二度中継しないと難しいだろう。また、対岸の島原半島との連携関係についても検討が必要だが、今後の課題としたい。

ほかにも、天草諸島内にはいくつか烽関連地名があるが、右に見たような烽に適した立地と言い難く、烽の存在を想定するのは、上記の飛岳や樋島、富岡など、八代海や島原湾を通って九州本島に侵入していく船に対するものにとどめておきたい。

（六）八代郡・芦北郡・球磨郡

（四）の宇城市の日嶽を最後にして、これより南の沿岸部にも駅路は続くものの、天草郡を除くと有力な烽関連地名がなくなる。そもそも候補も少ないが、水俣市長野の鳶山は、周りの山が高い中で目立つような地点ではなく、烽があったような立地には思えない。水俣市袋の「遠見」も近世の番所に由来するもので、古代の烽ネットワークの存在を主張するような状況にない。

そんな中で、内陸に入った球磨郡にはやや関連地名がある。しかし、錦町木上の「鳶迫」は完全な山奥で不適当だし、駅路のルートも考えると、地名だけを頼りにこの地域に烽の存在を考えるのは難しいのではないだろうか。

（七）阿蘇郡

阿蘇郡内には、まばらに烽関連地名が存在している。豊肥支路の駅路が通る阿蘇外輪山内側の北部では、阿蘇市黒川の「灰塚」が交通路にも近接する丘陵になっており適地で、外輪山内に入ってくる二重峠までは西に一〇キロ弱で、峠付近に烽があったと考えると間隔としてはちょうど良い。今回検討した「灰塚」の中では最もそれらしい立地にあるが、豊肥支路に沿って豊後まで烽による情報伝達が行われていたかという大きな問題になるので、ここではその可能性を指摘するにとどめておきたい。

豊肥支路の駅路について言えば、合志郡の大津町の「灰塚」や、西原村の「涼塚」も候補となるが、これらは熊本市方面の烽想定地や花房台地（泗水町）のトビ地名集中地域とスムーズに連絡できず、烽を想定するには不安が残る。

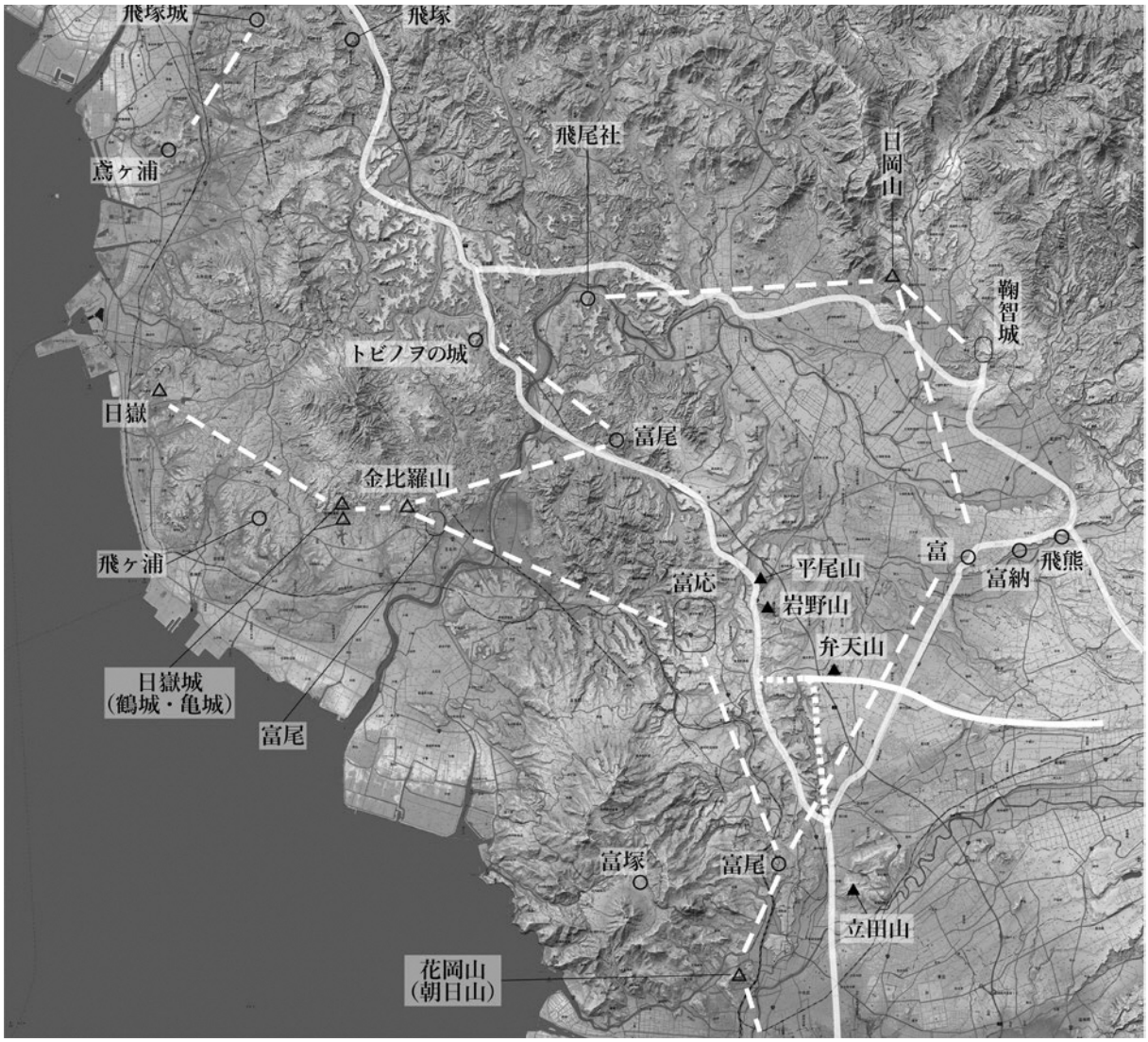
そのほかにも阿蘇外輪山の内外にトビ地名等はあるが、烽ネットワークの存在を浮かび上がらせるには至らない。駅路以外の古代交通路の研究の進展を期待しつつも、今は烽とは無関係の地名として理解しておきたい。

三　肥後国の烽ネットワークと交通路

以上の検討から、トビ地名・ヒノヤマ系地名を中心に、かなり多くの烽想定地を見つけることができた。地名から浮かび上がる範囲ではあるが、従来の想定に比べてより密で、具体的な烽ネットワークが見えてきたのではないだろうか。

一方で、「灰塚（二四）」やススミ（スズミ）地名は、烽に関連する地名であるという確信が得られなかった。旧稿による検討でも、古代山城の内部には必ずしも烽の施設が置かれていなかったことが窺われる一方、城の周辺には烽関連地名が残されている事例が多かったので（大野城・基肄城など）、鞠智城についても日岡山の烽がそういった存在であったと理解される。

本稿で想定している熊本県北部から中部にかけての烽ネットワークを拡大して示すと第10図のようになる。「延喜式駅路」ルートおよび「車路」ルート双方にトビ・ヒノヤマ系地名による烽候補地が見出され、南関町や熊本市北部にもう一つずつ設定すれば、ほぼ完全にネットワークとしてつなぐことができそうである。また、玉名郡家などの玉名郡の沿岸部を通るルート（木下一九七九・二〇〇二）にも烽が伴いそうで、有明海・島原湾沿岸の見張りが行われていたことを示すのだろう。



第10図　熊本県北部～中部の烽ネットワーク（稿）　（長い破線は烽同士の接続（視認可能）を示す）

これらの烽ルートが並存していたかという問題は、恐らくこれらの交通路が並存していたかという問題とイコールになる。七世紀後半に敷設された「車路」ルートから九世紀後半に「延喜式駅路」に変化するという鶴嶋氏の説（鶴嶋一九七九）も説得的だが、八世紀以降には、西海道でも北部九州沿岸以外では烽の存在意義は薄れていったと考えられる(二五)。九世紀後半の延喜式駅路の新置に伴って、和水町用木などに烽を設置するルートの変更が律儀に行われたと理解するのはなかなか苦しい。

もっとも、烽の存在自体は地名や立地からの推測で何も証明されていないところではあるが、上記の烽ネットワークを積極的に評価するならば、「車路」ルートや「延喜式駅路」ルート、玉名郡沿岸ルートの各交通路が、当初から並存していたと見る方が穏当である（日野一九九六、木下二〇〇二、木本二〇一四）。また本稿では結論は保留したが、豊肥支路に伴って豊後まで連絡している可能性もある。烽も交通路と同様に、軍事的な観点から複線的なネットワークとして設置されていたのだろう。それは福岡県域においては、古代山城の分布ともリンクしてくる（大高二〇一八）。

肥後国全体で見れば、熊本平野から下益城郡（古代では日嶽のある小川町＝「小河郷」は八代郡に属す）の沿岸部ぐらいまでは烽が置かれていた蓋然性が高く、宇土半島・天草諸島にも烽ネットワークが伸びていた可能性を想定した。それら沿岸部で察知した異変が、火や煙による信号で鞠智城、大宰府、そして都へといち早く伝えられる体制になっていたのである。

一方、今回の烽関連地名の集成結果からすると、この烽ネットワークが薩摩・大隅国方面までつながっていたとは言い難い。小字以外の地名を見落としている可能性もあり、南九州でも宮崎県えびの市に「灰塚」、同西都市三納に「鳶野」の地名などがあることから、結論を急ぐことは避けたいが、現状では右のような評価としておきたい。すなわち、筆者は鞠智城の築城に関して対隼人対策としての意味合いが大きかったとは考えていない。

おわりに

今回は一応熊本県の全域を検討の対象としたが、豊富な資料と広大な土地に対して、調査が不十分なものになっていないかを恐れている。特に、烽候補地を詳しく踏査することはごく限られた対象にしか行うことができなかった。筆者は今後も烽のネットワーク復元、そして烽の遺構発見への取り組みを続ける所存だが、このような調査は熱意ある地元の人々による知見や探索が大きな力となるので、今回の研究報告を機に古代の烽や交通路の研究に関する活動の輪が少しでも盛んになれば幸いである。

注

（一）二〇一八年九月一・二日に近畿大学東大阪キャンパスにおいて開催された第五七回古代山城研究会例会「古代山城とノロシ」での報告「トビ地名と古代烽の立地形態」の内容を含んでいる。

（二）日本思想大系『律令』（岩波書店、一九七六）による。

（三）信号用の旗を利用した漢代の烽燧の間隔は五キロ未満であり（籾山一九九七）、明代の烽燧や朝鮮王朝の烽燧も五キロぐらいの間隔で運用されていた（酒寄一九九七）。唐制が三〇里間隔とするところを日本の養老令が

敢えて四〇里とする理由は分かっていない。

（四）西南方向約一〇キロの距離で山陽道沿いに位置する富田（とんだ）の地名は、烽に由来する可能性があるのではないか。

（五）天照山の山頂には下の方から尾根沿いに続く土塁状の高まりや石材の散乱が認められるが、烽の遺構であるかは判然としない。

（六）「生駒山　飛火が岡に」（小学館新編日本古典文学全集『万葉集』の読み下し文）との一節がある。

（七）「春日野の飛火の野守いでて見よ今幾日ありてわかなつみてん」（岩波書店新日本古典文学大系『古今和歌集』）。

（八）鎌倉時代にも「とぶひ」の用例があるが、中世以降は概して「のろし」という表現が一般化していくようである（服部一九九七）。

（九）対馬においては、海岸線の展望の利く岬にある飛岳、飛崎（鳶崎）、鳶嶽、飛坂などの「トビ」地名が既に注目されていた（永留一九七九）。

（一〇）熊本県分は『明治前期全国村名小字調査書』六（内務省地理局編纂善本叢書三五、九州Ⅲ、ゆまに書房、一九八六）に「熊本県町村字調」として収載。

（一一）ＰＣソフト「カシミール３Ｄ」により国土地理院基盤地図情報を利用し、視認解析など地形の分析を行っている。また、地名の検索には上村重次編『改訂明治前期熊本県町村字名分類索引』一～一〇（私家版、二〇〇一～二〇〇三）を活用した。

（一二）ほかに「スス（煤）」「スズ（鈴・錫）」「ツツミ・ツヅミ（鼓・鞁）」「スミ（炭）」で始まる地名も一応集成したが、割愛する。

（一三）除いたトビ地名は以下の通り。「トビイシ（飛石）」「トビイリ（飛入）」「トビイワ（鳶岩など）」「トンゲウ（飛宮）」「トビノキ（飛ノ木）」「富籠屋敷（トミゴモリヤシキ）」「トビセ（飛瀬）」「トビノス（鳶巣など）」「飛付（トビツキ）」「トビナガ（飛永）」「トビハタ（飛畑）」「トビマツ（飛松）」「トビヤ（飛屋）」「トミヤシキ（富屋敷）」「トビワタリ（飛渡）」。

（一四）「灰」で始まる地名はほかに「ハイガサコ（灰ヶ迫）」「ハイキ（灰木）」「ハイケヅル（灰毛鶴）」「ハイクチ（灰口）」「ハイクボ（灰久保）」「ハイサカ（灰坂・這坂・拝坂）」「ハイサコ（灰迫）」「ハイジマ（灰嶋）」「ハイダテ（灰立）」「ハイツキ（灰付）」「ハイツチ（灰土・灰辻）」「ハイトオ（灰塔）」「ハイトリ（灰取）」「ハイハラ（灰原）」「ハイヤキ（灰焼）」があったが、割愛する。

（一五）「トミ」と読む可能性もある「十三」の付く地名（池田一九八九）については、「ジュウサン」と読むものしかなかったため、割愛する。

（一六）正確には、「カブラヤの城」と呼ばれた坂下城（下坂下字城平に所在）と二つに分かれていた。

（一七）一六六九年に成った『国郡一統志』（寺社総録十、玉名郡）には中下津原村に「飛尾大明神〈阿蘇二宮十一面観音平等寺〉」と記載があり、同（名社志七、玉名郡）にも「飛尾大明神者阿蘇二宮也。聖武帝天平年中建。白河院承暦元年菊池則隆再建。有平等寺。」と記す。『肥後国誌』にも下津原村に「飛尾大明神社〈東郷四百余町ノ鎮護神〉」とある。『肥後地志略』（井澤長秀撰。森下功・松本寿三郎編『肥後国地誌集』青潮社、一九八〇所収）玉名郡にも、「飛尾社　下津原村に有／天平十五年阿蘇太神を勧請す。」とある。

（一八）両者は旧稿では敢えて触れなかったが、今回肥後国との関係で烽の候補地と考えることにした。

（一九）合志郡は一八九六年に菊池郡に編入された。

（二〇）この西一キロ程の地点には改寄町の「灰塚原」の小字がある。ただし、高原駅家は植木町植木付近に推定するとの説も有力である（鶴嶋一九九七）。

（二一）『肥後文献叢書』三（隆文館、一九一〇）所収。『肥後国誌』（巻三、飽田郡、横手手永、横手村祇園宮）も同書を引用する。

（二二）直接烽には関わらないと考えるが、旧木原村には上飛田（ヒダ）・下飛田の小字がある。

（二三）近世の文献（『求麻外史』および『南藤蔓綿録』）の文亀三年（一五〇三）の記事に「富岡城主（留岡城主）」とあることが主たる根拠で、全面的には依拠できない。

（二四）「灰塚」について、上村重次氏はハイは「這」や「拝」の事例もあることを示すとともに、シルシとしての「牌」ではないかと述べている（上村一九九六）。

（二五）延暦十八年（七九九）の全国的な烽の廃止の際も、大宰府管内は対象外とされたが（『類聚三代格』巻十八関幷烽候事、延暦十八年四月十三日官符、『延喜式』（巻二十八、兵部省）に「凡太宰府所部国放レ烽者、明知二使船一、不レ問二客主一、挙二烽一炬一。若知レ賊者放二両炬一。二百艘已上放二三炬一。」とあるような外交使船や賊船の見張りは、ほとんどが対馬や壱岐、玄界灘沿岸でのことだったのではないだろうか。

参考文献

（論文等）

赤星雄一　二〇一四　「肥後国の古代官道」『国士舘考古学』六

網田龍生　二〇一七　「熊本平野の道」『海路』一三

池田末則　一九八九　「新十三塚考」『民俗文化』一

井上辰雄　一九七〇　『火の国』学生社

上村重次　一九九一　『玉名の地名』（私家版）

上村重次　一九九六　『字図で見る球磨の地名』蘇春堂情報センター

大田幸博　二〇〇七　「飛岳」『大矢野氏の活躍』上天草市史、大矢野町編二、中世

亀谷弘明　一九九八　「情報と社会―古代の烽―」『歴史と地理』五一四

木下　良　一九七九　「肥後国」藤岡謙二郎編『古代日本の交通路』Ⅳ、大明堂

木下　良　一九八六　「歴史地理的にみた交通・通信・情報の諸問題」『歴史地理学紀要』二八

木下　良　二〇〇二　「古代の交通と役所」『南関町史』特論

木下　良　二〇〇三　「西海道の古代交通」「古代交通研究」一二

木下　良　二〇〇九　『事典　日本古代の道と駅』吉川弘文館

木下　良　二〇一三　「烽と交通路」『日本古代道路の復原的研究』吉川弘文館

木本雅康　二〇〇三　「西海道における古代官道研究史」『古代交通研究』一二

木本雅康　二〇〇四　「地名から古代の〝烽〟を探す」『地名を歩く』別冊歴史読本八一、新人物往来社

木本雅康　二〇一四　「鞠智城西南部の古代官道について」『鞠智城跡Ⅱ』論考編一、熊本県教育委員会

久保山善映　一九三九　「九州に於ける上代国防施設と烽火の遺蹟」『肥前史談』一三-六

今平利幸　一九九七　「飛山城跡発掘調査概要」シンポジウム「古代国家とのろし」宇都宮市実行委員会／平川南／鈴木靖民編『烽［とぶひ］の道』青木書店（以下、『烽の道』とする）

今平利幸　二〇〇八　『飛山城跡』同成社

坂田邦洋　一九九七　「玉名郡衙」『企画展「玉名郡衙」』玉名市立歴史博物館こころピア

酒寄雅志　一九九七　「朝鮮半島の烽燧」前掲『烽の道』

佐藤　信　一九九七「古代国家と烽制」前掲『烽の道』
高橋富雄　一九七一「烽の制度とその実態」『東北学院大学東北文化研究所紀要』三
瀧川政次郎　一九五二a「律令時代の国防と烽燧の制」『律令諸制及び令外官の研究』法制史論叢第四巻、角川書店、一九六七所収
瀧川政次郎　一九五二b「春日の飛火野」『大和文華』七
瀧川政次郎　一九五三「唐兵部式と日本軍防令」『律令格式の研究』法制史論叢第一冊、一九六七所収
瀧川政次郎　一九六一「高見の烽」『ひらおか』九
武部健一　二〇〇五　木下良監修『完全踏査　続古代の道』吉川弘文館
鶴嶋俊彦　一九七九「古代肥後国の交通路についての考察」『駒沢大学大学院地理学研究』九
鶴嶋俊彦　一九九七「肥後国北部の古代官道」『古代交通研究』七
鶴嶋俊彦　二〇〇四「肥後国」古代交通研究会編『日本古代道路事典』八木書店
豊元国　一九六八「烽の研究」小田富士雄編『西日本古代山城の研究』日本城郭史研究叢書一三、名著出版、一九八五所収
永留久恵　一九七九「古代の烽燧」『対馬古代史論集』名著出版、一九九一所収
服部英雄　一九九七「中世・近世に使われた「のろし」」前掲『烽の道』
日野尚志　一九九六「西海道」木下良編『古代を考える　古代道路』吉川弘文館
松原弘宣　二〇〇九「日本古代の通信システムとしての烽」『日本古代の交通と情報伝達』汲古書院
峰岸純夫　一九九七「中世の飛山城跡」前掲『烽の道』
向井一雄　二〇〇七「古代烽に対する基礎的検討」『戦乱の空間』六
籾山　明　一九九七「中国の烽燧施設とその生活」前掲『烽の道』

（自治体史・郷土誌類）

※冒頭に自治体名を掲げ五十音順で並べ、自治体史の編者・発行者については省略した。必ずしも本文では言及しなかったが、小字の位置の確認などに参照したものも含む。

天草町　一九七八『天草町郷土誌』
有明町　一九七〇『有明町郷土誌』第四集
荒尾市　二〇〇一『荒尾市史』絵図・地図編
宇土市　一九九九『新宇土市史』資料編第一巻、絵図・地図
小川町　一九七九『小川町史』
鹿央町　一九八九『鹿央町史』
嘉島町　一九八九『嘉島町誌』
鹿北町　一九九六『鹿北町文化遺産マップ』（鹿北町老人クラブ連合会と共編）
鹿本町　二〇〇五『鹿本町史』下巻
河内町　一九九一『河内町史』地誌編
菊鹿町　一九九六『菊鹿町史』本編および資料編
菊水町　二〇〇五『菊水町史』絵図・地図編
菊水町　二〇〇六『菊水町史』資料編
熊本市　一九九八a『新熊本市史』第一巻通史編、自然／原始・古代
熊本市　一九九八b『新熊本市史』第二巻通史編、中世
熊本市　一九九三『新熊本市史』別編第一巻、絵図・地図下、近代・現代
熊本県　二〇一二『熊本県市町村合併史（三訂版）』
泗水町　二〇〇一『泗水町史』下巻

七城町　一九九一　『七城町誌』
岱明町　二〇〇五　『岱明町史』
玉名市　一九九二　『玉名市史』資料篇一／二、絵図・地図／地誌
富合町　一九七一　『村誌　富合の里』
南関町　一九九九　『南関町史』絵図・地図
西合志町　一九九四　『西合志町史』資料編
人吉市　一九九〇　『人吉市史』第二巻下
益城町　一九九〇　『益城町史』通史編
松橋町　一九八四　『松橋の地名とその歴史』（林田憲義著）
苓北町　一九八五　『苓北町史』史料篇

（調査報告書）
熊本県教育委員会　一九七八　『熊本県の中世城跡』熊本県文化財調査報告第三〇集
熊本県教育委員会　二〇〇九　『飛尾横穴群』熊本県文化財調査報告第二四六集
熊本県教育委員会　二〇一二　『鞠智城跡Ⅱ』熊本県文化財調査報告第二七六集
熊本市教育委員会　二〇〇七　『二本木遺跡群Ⅱ』二本木遺跡群第一三次調査区発掘調査報告書
福岡県教育委員会　二〇一七　『福岡県の中近世城館跡』四、福岡県文化財調査報告書二六〇
苓北町教育委員会　一九八六　『富岡城（城の歴史と城跡）』

（事典類）
※執筆にあたり参照した事典類については特に註記しなかった。
日本歴史地名大系四四『熊本県の地名』平凡社、一九八五
角川歴史地名大辞典四三『熊本県』角川書店、一九八七
島方洸一企画・編集統括『地図でみる西日本の古代』平凡社、二〇〇九

（追記）
第1～4・7・10図はＰＣソフト「カシミール３Ｄ」により国土地理院基盤地図情報を利用して筆者が作成した図を元にしており、標高は二倍に強調表示している。